

沖縄文化研究所

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

<p>【2020年度大学評価結果総評】（参考） 2020年度自己点検・評価実施なし</p>
<p>【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】 2020年度自己点検・評価実施なし</p>

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

<p>2020年度は自己点検評価活動を実施しなかったため該当なし。</p>

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2021年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

<p>1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。</p>
<p>2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。</p>
<p>① 研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）</p>
<p>※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・深瀬公一郎氏（長崎歴史文化博物館客員研究員・本研究所国内研究員）を講演者とする講演会「島津重豪の時代と琉球」（2020年11月4日〔水〕～2022年3月31日〔木〕までYouTube動画配信によるオンライン公開） ・向井一雄氏（古代山城研究会）・臼杵 勲氏（札幌学院大学）・小野正敏氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）・山本正昭氏（沖縄県立博物館・美術館）を報告者、石井龍太氏（城西大学・本研究所国内研究員）を討論司会者とするシンポジウム「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」（本研究所主催、沖縄県立博物館・美術館共催、沖縄タイムス社後援 2020年11月27日〔水〕～2021年3月31日〔水〕までYouTube動画配信によるオンライン公開） ・ウチナー口研究会（2020年5月28日、6月25日、8月18日、9月30日、10月25日、11月24日、12月20日、2021年1月24日、いずれもオンラインにて開催） ・オモロ研究会（2020年10月17日、12月12日、2021年1月30日、いずれもオンラインにて開催） ・宮古研究会（2021年1月30日、オンラインにて開催） ・例年、春・秋両学期にオムニバス形式で開講している総合講座「沖縄を考える」（ILAC授業科目）は、新型コロナウイルス感染症禍および必要な人員が得られなかったなどの理由により、開催できなかった。
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開講演会「島津重豪の時代と琉球」および公開シンポジウム「「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」は、いずれも沖縄文化研究所 YouTube チャンネル (https://www.youtube.com/channel/UCcKhhqzK9DI1GtvQUDs4NUg) より視聴可能。
<p>② 対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）</p>
<p>※2020年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以下の定期刊行物を刊行した。（なお、例年刊行している『琉球の方言』は、新型コロナウイルス感染症禍により編集委員会の開催が困難であった、原稿整理や印刷業者との連絡・調整に必要な人員が得られなかったなどの理由により、刊行できなかった。） <ul style="list-style-type: none"> ・『沖縄文化研究』（研究所紀要）第48号。 ・『法政大学沖縄文化研究所所報』第87号。 ・『沖縄研究資料 32 仲原善忠資料——著書論文目録・「家庭制度の主張」・『わか葉』』。 ・『法政大学沖縄文化研究所主催シンポジウム「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」報告集』。
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の刊行物はいずれも、本研究所開架図書室に配架し利用者の閲覧に供されている。
<p>③ 研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）</p>
<p>※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2020年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2020年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2020年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。</p>

- ・公開シンポジウム「「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」は、「グスクシンポに寄せて」石井龍太『沖縄タイムス』(2020年11月27日)、「首里城正殿14世紀後半には存在?遺構めぐり新説 立証には課題」上林格・石井龍太『朝日新聞(西部)』(2020年12月10日)、「沖縄の城 東アジアの視点で解きほぐす 東京・法政大学でシンポ」上林格『朝日新聞(西部)』(2020年12月16日)などでとりあげられた。
- ・公開講演会「島津重豪の時代と琉球」のYouTube動画アクセス数は2021年5月5日現在、358である。
- ・公開シンポジウム「「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」のYouTube動画アクセス数は2021年5月5日現在、1,148である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・同上。

④ 研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2020年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

「沖縄学研究機関所長会議」がオンライン(Zoom)にて2021年3月25日に名桜大学を幹事校として開催され、本研究所を含めた6大学の研究所(他は琉球大学島嶼地域科学研究所、沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄大学地域研究所、沖縄県立芸術大学芸術文化研究所、名桜大学環太平洋地域文化研究所)の所長および所員代表が参集した。相互の情報・意見交換を目的として年度内の活動状況などを報告したが、当研究所についてはコロナ禍での活動の工夫について概ね高評価を受け、「本土」にある研究機関として活動の充実への期待と更なる連携の必要性が確認された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2020年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金(外部資金の名称、件数等)及び2020年度中に採択を受けた科研費等外部資金(外部資金の名称、件数、金額等)を記入。

- ・2020年度中には科研費への応募が1件あり新規採択された。なお3件が継続採択となっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

⑥ 研究所(センター)における研究活動等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入。

- ・資料の閲覧について、以下の対応・対策を行なっている。
 - ①月・水・金曜日の閲覧室開室を10時～(昼休み12時～13時)～17時(COVID-19禍以前は20時)に短縮している。
 - ②閲覧室の利用には事前予約が必要としている。(利用者には、前営業日(※土日祝日は休業)の12時までに沖縄文化研究所宛にメールか電話で希望日時を連絡いただいている。)
 - ③利用者には、大学内への入構にあたって法政大学ホームページのキャンパス入構ルールを確認するようお願いしている。
 - ④利用者には「閲覧室利用予約票」を印刷していただき、必要事項を記載のうえ、キャンパス入構時と閲覧室入室時に係員へ提出していただいている。(「閲覧室利用予約票」を事前に印刷ができない利用者には、入室時に記入していただいている。)
 - ⑤利用者には、閲覧室への入室時には手指の消毒をお願いしている。
 - ⑥利用者には、閲覧室内でのマスク着用をお願いしている。
 - ⑦最大定員数は4名までとしている(グループ利用は不可)。
- ・新型コロナウイルスの感染状況を、また、大学の定める行動指針を見極めながら、所員・職員・アルバイトの勤務形態を、適宜にオンライン勤務としている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に

対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
.	

【この基準の大学評価】

沖縄文化研究所では、新型コロナウイルス感染症禍のもと、深瀬公一郎氏（長崎歴史文化博物館客員研究員・本研究所国内研究員）を講演者とする講演会「島津重豪の時代と琉球」、および本研究所主催、沖縄県立博物館・美術館共催、沖縄タイムス社後援のシンポジウム「グスクとしての首里城 ——東アジアの視点から——」が実施され、ともに YouTube 動画配信によるオンライン公開されたことは評価できる。ウチナー口研究会が計 8 回、オモロ研究会が計 3 回、宮古研究会が 1 回、オンラインにて開催されたことは評価できる。例年、春・秋両学期にオムニバス形式で開講している総合講座「沖縄を考える」（ILAC 授業科目）が開催できなかつたことは、予想できなかつた新型コロナウイルス感染症禍に原因があり、止むを得ない結果であると判断する。研究成果を示す定期刊行物『沖縄文化研究』（研究所紀要）第 48 号、『法政大学沖縄文化研究所所報』第 87 号、『沖縄研究資料 32 仲原善忠資料 ——著書論文目録・「家庭制度の主張」・『わか葉』』、『法政大学沖縄文化研究所主催シンポジウム「グスクとしての首里城 ——東アジアの視点から——」報告集』が刊行されたことは評価できる。唯一刊行できなかつた『琉球の方言』に関しては次号の充実を期待する。2020 年度中に科研費への応募が 1 件あり新規採択されたこと、および 3 件が継続採択となっていることは高く評価できる。

III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

2020 年度は自己点検評価実施なし。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

2020 年度は自己点検評価活動を実施しなかつたため該当なし。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	人文・社会の 2 つの研究プロジェクトが毎年、研究成果を刊行する研究体制をつくる。研究のための外部資金を確保する。収集・受け入れの進んだ研究上の貴重文献や各種コレクションの整理を進め、閲覧可能な形にして提供するとともに、HP などによるデジタルアーカイブ化を進める。また各種定期刊行物の発刊に努める。
	年度目標	①「総合講座 沖縄を考える」（秋学期）—難しい場合は、公開講座など代替事業—を実施する。 ②楚南家文書および赤木文庫（横山重琉球関係資料）の目録化と解説の作成を行う。 ③中野好夫資料の目録化を行う。（現在、資料の一部が目録化されているが、OPAC 登録情報とズレがあり照会しにくい。） ④各種定期刊行物を、予算面での可能性を勘案しながら、遅滞なく刊行する。 ⑤公開シンポジウムなど、沖縄復帰 50 年へ向けた記念事業を企画・立案する。 ⑥新型コロナウイルス感染症感染予防策をじゅうぶんはかりながら、可能なかぎり閲覧室の機能を維持する。 ⑦退任されるなどした運営委員の補充
	達成指標	①については、実施できたか否かの実績 ②については、目録化と配列した文書の点数 ③については、目録化した資料の点数 ④については、各々の刊行物について刊行できたか否かの実績 ⑤については、立案できたか否かの実績 ⑥については、開室日数および閲覧者数など ⑦補充できたか否かの実績
No	評価基準	社会連携・社会貢献

2	中期目標	総合講座「沖縄を考える」への社会人の参加を広げる。沖縄の現状等に関するシンポジウム、講演会等を定期化する。
	年度目標	①「総合講座 沖縄を考える」(秋学期)について、一般社会人の聴講を増加させる。 (新型コロナ禍以前の目標は「80名程度」まで増加させることであった。) ②①の総合講座開講が難しい場合、代替公開講座などを実施し、一般社会人の聴講者を一定数確保する。 ③沖縄復帰50年へ向けた事業を企画・立案する過程で、学外の研究者等と連携・協力する。
	達成指標	①については、一般社会人聴講者数および同聴講者数が全聴講者数に占める割合 ②についても、一般社会人聴講者数および同聴講者数が全聴講者数に占める割合 ③については、企画・立案を検討する会合の開催回数・検討内容など
<p>【重点目標】</p> <p>①各種定期刊行物—とりわけ、2020年度に刊行できなかった『琉球の方言』—の刊行 ②沖縄復帰50年へ向けた—公開シンポジウム等—記念事業の企画・立案</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>①については、編集委員会の活性化(構成員の補充など)をはかる。 ②については、企画・立案に広く学外研究者等の参加を請い、協力・連携体制を構築する。</p>		

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

沖縄文化研究所では、「研究活動」「社会貢献・社会連携」の両評価項目ともに、年度目標の設定は中期目標に沿うものである。「研究活動」については、受け入れた貴重文献や各種コレクションの目録化および解説の作成、定期刊行物の遅滞ない刊行という形で年度目標が設定されていることは、適切かつ具体的と評価できる。2020年度に刊行できなかった定期刊行物『琉球の方言』の刊行を重点目標に掲げていることは、首肯できる。その刊行と2年分に当たる内容の充実を期待する。「社会貢献・社会連携」に関して、「総合講座 沖縄を考える」(秋学期)の一般社会人の聴講を増加させるという目標掲げていることは評価できる。新型コロナ感染症禍の今後の状況が見通せないなか、その実施が難しい場合は、代替の公開講座等を実施することが考えられている点は評価できる。沖縄復帰50年へ向けた事業を学外の研究者等と連携して企画する年度目標が掲げられており、その進展が期待される。

【大学評価総評】

沖縄文化研究所では、新型コロナ感染症禍のもと、深瀬公一郎氏(長崎歴史文化博物館客員研究員・本研究所国内研究員)を講演者とする講演会「島津重豪の時代と琉球」、および本研究所主催、沖縄県立博物館・美術館共催、沖縄タイムス社後援のシンポジウム「グスクとしての首里城——東アジアの視点から——」が実施され、ともにYouTube動画配信によるオンライン公開されたことは評価できる。ウチナー口研究会、オモロ研究会、宮古研究会がオンラインにて開催されたことは評価できる。例年、春・秋両学期にオムニバス形式で開講している総合講座「沖縄を考える」(ILAC授業科目)が開催できなかったことは、予想できなかった新型コロナ感染症禍に原因があり、止むを得ない結果であると判断する。研究成果を示す定期刊行物が『琉球の方言』を除いて刊行されたことは評価できる。

「沖縄学研究機関所長会議」は琉球大学島嶼地域科学研究所、沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄大学地域研究所、沖縄県立芸術大学芸術文化研究所、名桜大学環太平洋地域文化研究所、法政大学沖縄文化研究所の六つの研究所で構成されている。「本土」にある研究機関として、その特質を生かした情報発信・教育研究を進めてゆくことが期待されている。また、研究所の基盤をなす活動として、貴重な学術資料の整理と公開が、今後着実に進展してゆくことを期待する。なお、自己点検・評価シートでの自己点検において「長所・特色」、「問題点」が挙げられていなかったが、今後の発展のために必要であると考えられる。